

季刊 連句 第9号



からむし庵 (南柏雜記 7).....	1
発句の資格—連句雜感 (1).....	草間時彦 ..... 2
連句の読み方・味わい方.....	東明雅 ..... 6
—「木のもとに」の巻—	
牛耳傳 (2).....	杉内徒司 ..... 10
二十韻 春ノ月.....	三吟..... 川草東 野間 蓼時明 艸彦雅 ..... 12
絶頂の城 付勝練習歌仙.....	18
芦丈先生墓参行.....	福井隆秀 ..... 20
第十三回猫蓑会五歌仙.....	22
花の土手.....	大窪 瑞枝 捌... 22      さくら東風..... 山口みづゑ 捌... 22
紫木蓮.....	高瀬 美保 捌... 23      花びら..... 副島久美子 捌... 24
木蓮の日昏れ.....	米谷 貞子 捌... 24
質疑応答.....	5      連句会案内..... 25      雁帛往来..... 25

表紙 (笥) 宮崎 龍火子

からむし庵

南柏雜記 7

四月二十三日、伊那市西町の長桂寺で、芦丈先生のお墓に香華をたむけた猫蓑会有志一行十五人は、それから同市山本町にあるからむし庵(芋庵)に向かった。からむし庵は昭和七年、諏訪倉庫株式会社を停年退職された芦丈先生が郷里に引退して建てられた草庵で、当時、麻に似た雑草のからむし(芋)が生い茂っていた所から名を付けられたものである。そして昭和四十三年に歿されるまで四十年近く、ここに住み、連句一途の生活を送られた所であった。

この間、連句は世に埋れて、全く省みられず、滅亡の一步手前の状態であった。明治以后、社会、文学の風潮が連句に合わなかった為であるが、例の「連句非文学論」が現われると、無批判に同調する者が多く、連句と言えば旧時代の象徴と見られる時代が続いた。

一般の人は仕方がないとしても、国文学者、ことに俳諧

研究家までが、この俗説を鵜呑みにして、反論した者が一人も無かったのは、何とだらしないことだったであろう。芦丈先生はそのような風潮の中で、ひとり、その師馬場凌冬から学んだ伊勢派の俳諧を守り続け、更にこれを復活させようと努力された。齡卒寿に及んで連句の専門誌「山襖」を刊行され、二十四冊に及んだという事実からしても、並々ならぬ熱意と努力の跡が偲ばれる。

昭和四十三年に逝去された先生は、去年がちょうど七十七回忌だったが、たまたま私はその前年に病氣をして墓参もできなかった。一年おくれの今年、墓参を済ませ、久しぶりにこのからむし庵にうかがうと、先生在世時代の懐かしい記憶が昨日の如く蘇る。先生の御次男忠二氏の末亡人関子さん、お孫さんの美紗さんの、心からなる御歓待をうけて、三卓に分かれ、「雲よ霞と六十余年の花乞食」という先生の句を立句に、追善の二十韻を興行したが、からむし庵で連句が興行されるのも全く久しぶりで、仏壇の遺影も本当に嬉しそうであった。

# 発句の資格

―連句雑感(一)―

草間時彦

このごろ、脇起り連句を見掛けることが多い。脇起りは申すまでもなく、発句をその席に居ない他の人から借りてくることだ。多くの場合、故人の句を借りるのである。最近の諸誌に発表される作品を見ると芭蕉の句と蕪村の句が多い。

脇起り流行という現象をわたくしは苦々しい気分で見ている。何故かということの説明してみよう。

第一に言えることは、芭蕉の句を発句として連句興行をしようとするならば、それは、その日が芭蕉忌であるとか、その土地が芭蕉所縁の地であるとか、芭蕉翁を偲ぶ特別な意味がなければならぬものである。発句を作るのが面倒だから芭蕉の句を借りる、発句を作れる人がいないから、歳時記を開いて、蕪村の句を拾って発句にする。いささか情けない話だと思ふのである。

歌仙には三十六の座があるわけである。恋の座、月の座、花の座とあるが、もっとも高いのは発句の座だろう。

なにしろ、三十六句の先頭に立って、後に三十五の句を引きいての大將軍の座だ。栄光の座である。そういう座を放棄することは連句に対する冒瀆行為ではないかと思ふ。発句を指名された場合に、

「発句を仕る」

という言葉がふさわしいように思う。日常に用いられる言葉ではないが、気分としてはそういうことなのだと思うのである。

しかし、現実の問題として、四、五人で連句の座を持つ場合に、発句の作者がいけないということはない、無いことではない。それで、芭蕉か蕪村の句を発句として一卷を進めて行くとしよう。たしかに、芭蕉なり、蕪村なりの句は優れている。しかし、古典である。二百年、三百年以前に生きていた人の作である。現代人の現代感情とどうしてもちぐはぐになる。それは当然のことだ。わたくしが脇起り連句を見たときに気になって仕方がないのは、発句と第二句以下の流れとの間に断層があることである。脇起りの場合発

句と脇と第三句を競べてみて、三つ物の形で見ると、芭蕉の発句と現代人の脇との間に断層が感じられない。びつたりとしてるのである。同じ作品を、今度は三十六句を通して読む。そうすると、発句とそのあとの三十五句との間に明らかな断層が感じられるのである。発句が三十六句のうちで生きていない。床の間の掛軸の俳句のようで、掛軸の前の座敷で、三十五句がガヤガヤとたむろしているという感じなのである。連句を、付句の味、打越との関係、それだけで評価することが現代連句の主流となっているが、もとより、それは間違っているわけではない。しかし、ときには歌仙ならば三十六句全体で見るといふことが必要ではないかと思ふ。三十六句を一つの作品として見ることを忘れてはいけない。現代社会で生きる現代人が営む連句の発句は現代俳句であるべきだと思ふ。

それでは、現代俳句ならば、すべての現代人の俳句が現代連句の発句となり得るかという点、そうではない。そのあたりが難しいことだと思ふ。発句となり得る資格とは何か。それを少しばかり考えてみたい。

発句の資格というか、発句とはどうあるべきかという点とは多くの人々によって論じられて来た。本稿で、わたくしはその諸説を繰返すつもりはない。別の角度から考えてみたい。

端的に言うならば平句と違うということではないかと思ふ。発句と平句とは違うということは当り前のようだが、そのことはもう一度、確認した方がよろしい。その発句が

平句として通用しないということが大切なのではないだろうか。発句を平句の長句と入れ替えてみる。そうしたときに、その姿に違和感があつて、どうしても平句の位置に収まらない。それが発句だ。平句の位置に収まるようならば、その一句は発句の資格が無いということなのである。

具体的な例で説明してみよう。

時彦

痛風が出さうな雪が降りさうな

わたくしの句である。今年の一月の作。

俳句には考えて生れる句がある。考えに考えた末に生れる句。そういう句とは反対に、なんとなく生れる句もある。生れるというよりも、浮んだ句と言った方が適切である。この句はまさに浮んだ句。メモに書いてみて、おやおや、こんな句が出来てしまった。句帳に残して置いてよいものだろうか、自分自身で大いに迷ったものである。わたくしは二年ほど前に痛風の発作が出たことがある。痛かった。廻りの友人は「美食の祟りだ」と笑っていたが、全く痛かった。幸いに、川畑火川国手の手当てで、痛みはすぐ消えて、その後、尿酸値もどうやらで、再発はしていない。しかし、ときどき、右の足の親指の付け根になんとか違和感を覚えることがある。そういうときに浮んだ句で、作者自身、決して優れた作とは思っていない。しかし、こういう句は作者の足跡みたいなもので、捨てずに残して置くのが本当だと思ふ。

話が横道に入ってしまったが、この痛風の句が連句の発句となり得るかどうかと言うならば、ノーである。又、こ

の句を平句の長句として、連句のどこかへ収めたら、案外にびったりするかも知れない。そういう俳句は発句とはなり得ない。句の姿も、句の内容も発句の資格を持っていないのである。

枯真菰水漬きて水っ漙のごと

時彦

この句はどうだろう。潮来での作だ。冬ざれの水郷はよかつた。菖蒲も真菰も枯れて、ぐしゃっと一魂となっていた。菖蒲田には水がなかったが、沼べりの真菰はなかば水に漬いていたのが印象的だった。この句は浮んだ句ではない。苦勞をした末の句である。「水っ漙のごと」を得て、はじめて、詠いたいものが言葉になったと思った。汚い句で申しわけない。

さて、この俳句が連句の発句となり得るか、どうかとなると考え込んでしまう。どんなものであろうか。もし、本誌の読者で、この句を発句として歌仙を巻こうという篤志家が現れたならば、わたくしは「おやめなさい。」と申し上げるであろう。この句は写生の俳句である。十七字の裡にぎっしりと内容が詰っている、余白のない俳句である。内容が十七字から溢れてはいないが、密画のような俳句だ。

やっばり発句は余白のある句であって欲しい。余情のある句と言ってもよい。そうでないと、脇が付け難い。写生の俳句は一句が一句で完結している俳句である。又、この句は「水っ漙」という言葉を用いているが、差支えないと言えは言えるが、いささか句品が落ちる。発句にふさわしくないとと思うのだが、それではこの句を、平句のどこか

に入れて収まるかどうかという点、収らない。平句としては重過ぎるのである。連句の発句にもならないが、平句にもならない俳句なのである。

下京やあんかけうどん雪催

時彦

凡兆には遙かに及ばないが、これは発句になりそう。ただし、申し分のない発句というわけにはいえない。

雪雲の切れて日の射す恵方かな

時彦

これは申し分のない発句。申し分がないということは、脇起り連句で借りて来た芭蕉の句と、以下の三十五句との間に断層が生じるようだ。姿も内容も古俳諧に模した発句の場合は、連衆の顔ぶれによっては同じような事態が生じる恐れがある。この句は現代感情が乏しいからなのである。発句はどうあるべきかということ、くどくどと書いて来た。連句の発句たり得る俳句の資格をわたくしなりに端的に定義付けるならば、次の通りである。

「発句は必ず切字が入っていること。平句は切字が入っていないこと。」

逆は真なりとは言えない。切字が入っていれば、発句になり得るとは言えない。又、切字が入っていても平句となることもある。

俳句は本来は切字が入るのが当然だった。俳句は定型(五・七・五)、季題、切字の三つで成り立つというのが古来からの鉄則である。

俳句を「や・かな・けり」と呼んだのがそれである。だが、現代俳人は切字の使い方が下手になった。切字が使い

切れなくなった。それは、連句人のことではなく、現代俳人全般について言えることなのである。「痛風が出さうな雪が降りさうな」のような切字があるような、ないような句が俳句として通用する現代俳句である。もっとも、これは口語的発想、口語的表現が俳句に入って来たからでもある。

これは、現代俳句の問題であって、連句だけの問題ではない。連句の場合には平句で、どこまで口語を認めるかが問題となるのだが、それは本稿とは別に考えてみたい。

わたくしは連句の発句は「発句らしい発句」であって欲しいと念じている。「発句らしい発句」とは切字の働いている句と見てもよさそうである。切字の持つ「間」が大切なのである。そして、四、五人の連句の座が設けられるときは、現代連句にふさわしい発句を出せる人が一人や二人は居て欲しい。

現代連句人は発句作りの勉強が不足なようである。俳句作りの勉強をしろとは言わないが、発句作りは学んで頂きたい。

(六〇・四・二七)

東明雅 校注・訳

好色五人女

価一九〇〇円

好色一代女

発行所 小学館

### 質疑応答

問29 朝粥をすませ瓢亭月ほのか

30 菊枕もて喜寿を祝はれ

31 へこみたる石段すいと鬼やんま

この29、30、31の季節について、三秋、晩秋、三秋となっておりすが、よろしいでしょうか(三鷹 大窪瑞枝)

答 この季戻りの問題については、論がありましたので、この際、私の考えを述べておきます。芭蕉の時代はすべてが大まかで、

5 有明の七つ起きなる薬院に (三秋)

6 ひさごの札を付わたしたり (三秋)

7 秋風に槇の戸こぢる膝入れて (三秋)

5 草枕このごろになき月の晴 (元禄三年 種芋やの巻)

6 猿の涙か落つる椎の実 (晩秋)

7 石垣の継目も見えず苔の露 (三秋)

など、三秋で通した例や、三秋、晩秋、三秋となつてい

る例など沢山あります。

しかし、たとえば晩秋、晩秋、初秋などの季戻りがある

と、不自然ですし、違和感が起こるのも事実です。だから、不自然さや違和感のない程度なら許容してもよいと思

います。御質問の菊枕と鬼やんまについて言えば、菊枕は

秋の末、鬼やんまは三秋と言つても、初秋、仲秋の感が強

いので、私としてもやはり、いささか不自然に思われます。

# 連句の読み方・味わい方

—「木のもとに」の巻—

東 明 雅

表	裏
1 発句 木のもとに汁も鱈も桜かな	17 千部読む花の盛りの一身田
2 脇 西日のどかによき天気なり	16 雁ゆくかたや白子若松
3 第三 旅人の風かき行く春暮れて	15 秋風の船をこはがる波の音
4 はきも習はぬ太刀の鞘	14 月見る顔の袖おもぎ露
5 月待ちて飯の内裏の司召	13 物おもふ身にも喰へとせつかれて
6 粃臼つくる袖がはやわぎ	12 ほそき筋より恋つものりつゝ
7 鞍置ける三歳駒に秋の来て	11 中にもせいの高き山伏
8 名はさまんに降替る雨	10 いふ事を唯一方え落しけり
9 入込に諏訪の涌湯の夕ま暮	9 中にもせいの高き山伏
10 裏	8 中にもせいの高き山伏
11 裏	7 中にもせいの高き山伏
12 裏	6 中にもせいの高き山伏
13 裏	5 中にもせいの高き山伏
14 裏	4 中にもせいの高き山伏
15 裏	3 中にもせいの高き山伏
16 裏	2 中にもせいの高き山伏
17 裏	1 中にもせいの高き山伏

名残の表	名残の裏
18 巡礼死ぬる道のかげろふ	36 虻にさゝるゝ春の山中
19 何よりも蝶の現ぞあはれなる	35 花咲けば芳野あたりを欠廻り
20 文書くほと力さへなき	34 医者のくすりは飲まぬ分別
21 羅に日をいとほるゝ御かたち	33 一貫の銭むつかしと返しけり
22 熊野みたきと泣き給ひけり	32 花薄あまりまねけばうら枯れて
23 手束弓紀の関守が頭に	31 唯四方なる草庵の露
24 酒ではげたるあたま成覧	30 月夜に明け渡る月
25 双六の目をのぞくまで暮れかゝり	29 憎まれていらぬ躍の肝を煎り
26 飯の持仏にむかふ念仏	28 我名は里のなぶりもの也
27 中々に土間に居れば蚤もなし	27 中々に土間に居れば蚤もなし
28 我名は里のなぶりもの也	26 中々に土間に居れば蚤もなし
29 憎まれていらぬ躍の肝を煎り	25 中々に土間に居れば蚤もなし
30 月夜に明け渡る月	24 中々に土間に居れば蚤もなし
31 唯四方なる草庵の露	23 中々に土間に居れば蚤もなし
32 花薄あまりまねけばうら枯れて	22 中々に土間に居れば蚤もなし
33 一貫の銭むつかしと返しけり	21 中々に土間に居れば蚤もなし
34 医者のくすりは飲まぬ分別	20 中々に土間に居れば蚤もなし
35 花咲けば芳野あたりを欠廻り	19 中々に土間に居れば蚤もなし
36 虻にさゝるゝ春の山中	18 中々に土間に居れば蚤もなし

この歌仙のできた事情から説明する。元禄二年（一六八九）、「おくのほそ道」の旅を終った芭蕉（四六歳）は、そのあと、元禄四年十月、江戸に帰るまでの二年余りを、故郷の伊賀、京都、そして湖南の大津、膳所などを遊歴した。

元禄三年三月二日、彼は伊賀の門人小川風麦の家で花見をして、その時の俳諧における発句に、

木のもとに汁も鱈も桜かな

という句を作り、これに亭主の風麦が、

明日来る人はくやしがる春

という脇句を付け、以下、第三、四句目と続けて一卷を満尾したのであったが、この巻には途中からの参加者もあって、歌仙で終る予定が四十句まで延びてしまった。これは不自然だと言うので、名残の表の折立（第十九句目）以下を作り直して、歌仙として満尾したのであったが、この巻も芭蕉の心に叶わなかつたらしく、その直後、近江の膳所に赴いて、ここで同じ発句を立てて改めて浜田珍碩・菅沼曲水と三吟で一卷を首尾した。こうして最終的に出来上がったのが「ひびき」（元禄三年八月刊）に収められたこの巻である。

## 花見

木のもとに汁も鱈も桜かな

翁

この発句は、既に述べたように、元禄三年三月二日、伊賀上野の小川風麦亭に招かれて興行した俳諧の発句であ

庭の満開の桜の下に酒肴を設け、これから一卷を巻こうとするにあたり、並べられた汁碗や鱈の皿にまで落花が降りかかる。主賓である芭蕉は、早速これに目を付け、これほどすばらしい御馳走はありませんという挨拶の意を裏にこめて、この句を作ったものである。このよ句は、俳諧の席に招かれた客は、即座にその時、その場の景を述べた句を出して、亭主に挨拶するのがならわしである。

この席に、芭蕉の門人で、後に有名な俳論書「三冊子」を著わした服部土芳も出席していた。そして彼は、その時の芭蕉の言葉を、

此句の時、師の曰く「花見の句のかかりを少し心得て、軽みをしたなり」となり

と三冊子（赤雙紙）の中に述べている。

「軽み」というのは、芭蕉最晩年に到達した最高の境地と言われるが、その語が元禄三年のころ使われていることは注意すべきことである。「花見の句のかかりを少し心得て……」とは、「花見の句としての声調上のおもしろさを会得して、軽みを出した」の意と解され、具体的には「汁も鱈も」という俗なものでしかも声調のよい詞で、うまく花見の興を詠んだところに、俗の中に雅を求める「軽み」の思想が表現されているのである。

俳諧の発句は、いわゆる現代の俳句とは異なる。あまり凝りすぎた句や調子のつまった句などは、現代俳句としては好いものでも、俳諧の発句にはむかない。その点から見てもこの句は、目にみたままを叙べて、声調もよく、俗の

中に雅があり、申し分のない発句である。花山院の歌や西  
行の歌に典拠を求める説もないではないが、和歌をふま  
えたものであったら「軽み」の句とはならないであろう。

ところで、風麦亭で巻いた時は、この発句には「誹諧之  
連歌」という外、特別な前書は加えられなかったのに、こ  
の巻では「花見」という前書が加えられている。この前書  
は元々、この席で芭蕉が付けて連衆に示したのか、あるいは  
「ひさご」が編集された時、編者の珍碩らと計って加え  
たのか不明だが、確かに、「花見」という前書を添えるこ  
とによって、一卷に華やかな気分が加わったことは事実  
にしても、果して芭蕉が最初からそこまで計算して付けた  
であろうか。私はむしろ一卷満尾の上、出版する時に、「冬  
の日」にならって歌仙に前書を添えたもので、芭蕉よりは  
むしろ珍碩らが主唱したのではないかと思う。

季語 桜は三月。末春

木のもとに汁も鱧も桜かな  
西日のどかによき天気なり 珍碩 翁

〔現代語訳〕花見の宴、木もとの汁にも鱧にも桜の花  
が散りかかるこののどかなよい日和も、ようやく西に傾き  
ましたが、どうぞ御ゆっくりおたのしみ下さい。

〔付心〕発句の情景を受けて、その日の天候をもって打  
添えた付け。七名でいう通句。八体でいう天相の付け。客  
の挨拶に対する亭主の挨拶でもある。

〔付味〕西日に輝く花の色や、暖気に乗って馥郁と匂い  
立つ桜への思いが、言外の余情として醸し出されてくる句

れるが発句の情景に「けり」留の天候で応じたところ  
は、やはり「霜月や」歌仙の影響を見ることが出来る。

発句が風麦亭の俳席での挨拶であることは既に述べた通  
りであるが、これに対し、風麦は「明日来る人はくやし  
がる春」と付けた。これは源道済の和歌（「統後拾遺和歌集」  
、「万代和歌集」）、「木の本にけふはくらすむ山さくら後に  
尋ねば散りもこそすれ」の心を取って応じたものである  
う。「明日来る人が悔しがる」とは、今日集った者の満足  
を言っているわけで、芭蕉の挨拶に対し、一応挨拶をかわ  
した形にはなっているけれども、その言い方が何か迅速で  
あり、折角、発句が「軽み」を提唱した作であるのに対  
し、古歌に基づき付け方そのものが、芭蕉には飽き足りぬ  
思いがしたことであろう。

珍碩はその点を心得ていた。膳所での俳席は三月何日か  
不明であり、あるいは四月になってからの興行かとも言わ  
れている。もちろん、その俳席には、桜もなかったと思わ  
れるが、発句の挨拶の心をよく読み取って、それに応じた  
脇句の挨拶をさり気なく返しているのは見事である。珍碩  
はその当時、「冬の日」の境地にそこが、名古屋の俳人  
たちに特別な親近感を持っていたことは、この「ひさご」  
の序文をわざわざ名古屋の越智越人が書いていることによ  
つても知られる。そのように「冬の日」に熱中していた  
珍碩である。頭の中には「冬の日」の数々の名句がいつぱ  
いつまっていた筈である。それで、この発句に対する脇を  
付ける時、自ら「冬の日」という題号のもとになったとま

い付である。特に「のどか」の一語は、発句のほんのり  
した花やかさを、より一層匂い立たせ、桜の木の下での宴  
席のありさまを和氣瀟瀟とした満ち足りた気分させてい  
る。このように、句意を包むようにして、蘭の春を満喫さ  
せてくれるような余情によって、発句と脇句の世界が深め  
られ広められるところに、付味の意味がある。

〔補説〕発句と脇句の関係は、同季、同時、同処で、し  
かも和歌の上の句と下の句のようにせよというが、「付合  
手引蔓」は、「久かたのひかりのどけき春の日にしづここ  
ろなく花のちるらん―此うたを照し合せて見ればいよ／＼  
おもしろい」という。

また、季語の「のどか」は三春にわたるが、ここでは発  
句の「桜」の花期に従って、晩春と理解する。「増補俳言  
集覧」に、「俗に晴をよき天気と云」とある。ここでは上  
七に「西日のどかに」という晴天の意があるので、「よき  
天気」は快適な気候の意を表わす俗語的な表現といえよ  
う。このために脇句は、景気の句（人情なしの句、場の  
句）でありながら、余りの長閑さに思わず漏らした独自の  
感を与える。

さらに、脇句は韻字（名詞）留にするという作法がある  
が、ここでは指定の助動詞「なり」の終止形で留めてい  
る。「秘註俳諧七部集」では、「田家眺望 霜月や鶴のイ  
々ならびあて 荷兮／ 冬の朝日のあはれなりけり芭蕉」  
（「冬の日」）の脇句の格に習ったものであると指摘する。  
活用語の終止形で脇を留めた例はそれ以前にも幾つか見ら

で言われる芭蕉の名脇句「冬の朝日のあはれなりけり」  
が、自然と頭の中に蘇って来て、それとよく似た、しか  
も、この発句にびつたり「西日のどかに……」という句  
が浮んで来たのは、むしろ自然と思われる。そして、その  
句に芭蕉も満足したに違いない。

西日のどかによき天気なり  
旅人の風かき行く春暮れて 珍碩 曲水

〔現代語訳〕春もすでに末のころ、西日のどかな夕暮時  
分、旅人が風にくわれた所をかきながら街道を歩いて行く  
（付心）七名で言う起情の句。人情他の句。尤も天氣に  
旅は付合（類船集）

〔付味〕前句の春暖の気分を受け、また、西日のどかな  
夕暮の情と、春暮れての気分もうつりあう。移り  
（転じ）発句、脇の雅びな、沈静の気分を転じて、下輩  
の旅人が風をかいてゆくという、俗な動きのある景に転じ  
た。発句は「花見」と前書が付いていて人情自の句であろ  
うが、人情なし、場の句とも取れる。脇句ははっきり場の  
句である。だから、人情の句、それも人情他の句が欲しい  
ところ。旅人ははっきり人情他である。

〔補説〕「付合手引蔓」に「扱第三は西日といひ、長閑  
なる天氣と、時節に人情を起して 旅人と云く趣向にて  
『風播ゆく』と作をもとめ、姿をあらはし、『春くれて』  
と季節を動かさぬで、よく付たものじや。是等かかの百句  
の中に有ても、第三と見える句といふので有ふ」と言う。  
まことに適切な説明であるから、よく味読して欲しい。

## 承前

『私は野村先生がこの道で一方の旗頭であることがわかったので、独吟数巻を御閲覧願って、御教示を乞うた。』  
「全部いけません」

といわれる。道理である。全然法則を知らず、十七字句と十四字句とをずらずらとつらねただけのものだ、箸にも棒にもかかる道理はない。これが、私と連句宗匠としての野村先生との出会いである』  
海音寺が牛耳の一周忌に寄せた次の随筆も牛耳を語る好文章である。

「野村愛正氏は、ぼくの連句の先生で、ひところは毎月ぼくの家に同好者が集まって、歌仙を巻いたのだから、最も親しい人だったのに、その野村さんが病気になられたことも、死なれたことも、ぼくは知らなかった。(中略)」

野村さんは、朝日新聞の懸賞小説で世に出た人だ。ぼくが中学の三、四年生の頃だから、大正五、六年頃だ。

結成された。牛耳は推されてその代表となり捌きを担当した。そして作品が百五十余巻に達した頃、その中から歌仙三十六巻を選び昭和四十年十二月、第一作品『草上の虹』を上梓した。牛耳はこの刊行を機に、捌きを同人八人による輪番制に改めた。

そもそも蕉風俳諧では捌きは宗匠か、それに準ずる長老が担当するのが不文律である。ところが、後世、宗匠が捌きをする慣例は必ずしも人格や識見に敬意を払った結果だとは云いきれないものがある。むしろ宗匠自身が捌きを固執したからだ。

捌きは即ち権威である。これを手放して他に握られると、今度は宗匠自身が句を捌かれて権威を失うから捌きを任せられないのだと、牛耳は兼々考えていた。三百年の伝統の宗匠捌きを打破したのは私ですよ、というのが牛耳の自慢であった。

都心連句会は四十四年三月第二作品集『むれ鯨』を上梓したが、  
「両書と比較すると、作品の質は『草上の虹』が上になりましょう」と控え目な口調で牛耳が云われたことがある。

## 四

ある時、私は連句大会開催を思い立ち、いろいろ苦勞を重ねた末、昭和四十六年十月十日、東京青山の料亭「いろは」を会場として俳諧時雨忌を興行した。

文学少年であったぼくは『明け行く路』が発表された時の、野村さんの颯爽たる新進作家ぶりを、九州のはてから仰望したのであった。吉屋信子さんより前だったと記憶している。ずいぶん活躍した人だが、戦争中からピタリと筆を絶たれた。よほど何か強く感ぜられたことがあるのだろう。

ある時、二人の間で、有島武郎のことが話題にのぼった。その時、野村さんは、『あの波多野秋子という女ね、あれは心中癖のある女でして、ぼくにも一緒に死のうとさそいかけたことがあるのですよ』  
と語られた。こんな話を沢山書いておいて下されば、どんなに大正文壇史研究に役に立つかわからないのにと惜しい。(朝日新聞50、7、10)

## 三

昭和三十六年六月、根津芦丈門の清水瓢左と、ホトトギス系俳人の池田豊城、大林柚平とが相寄って都心連句会が

この興行は幸に成功して、今日まで続けられているが、なおその他これを機会に牛耳を捌きとする東京義仲寺連句会が結成され、月一度の例会をもつようになった。

この会の連衆は作家、詩人、ジャーナリスト、大学教授が多く、実作修練に熱心であったので、牛耳の指導も、これに応えて懇切を極めたため進境いちじるしいものがあった。

牛耳は「連句の愛好者はどれほどあるかといえば、正確なことはわからないが、全国中を尋ね歩いて、せいぜい三百人から五百人の見当だろう。しかも年々ますます連句人口は減っていつている。このままの傾向がつづけば、連句が日本から姿を消すのは、おそらくそんなに遠い将来ではあるまい」(『草上の虹』あとがき)と書き、「このままでは連句は滅びる」と口ぐせのようにいわれていた。

しかし、東京義仲寺連句会の月例会を指導するうちに「連句は甦える」(『民主公論』四十七年正月号)と感じるようになってきたようだ。

牛耳が晩年に育成した東京義仲寺連句会の直門三十余名は、師の没後、指導をうけた歌仙五十六巻をまとめ『摩天楼』として上梓、その一周忌に靈前に捧げている。

直門の一人林富士馬は、俳諧俳論集『行々子』に、次のように記している。

「誰れ一人認めるひとがいなくとも、私は『摩天楼』を我ら昭和新詩の『冬の日』とも『炭俵』ともするのである。敢えて『猿蓑』とは云うまい。」

三吟

二十韻 春 月

春 月や木の間は余呉の水明り  
帰りし鴨に睡るにおどり  
蕨餅まづ落付きの茶を飲みて  
歩みそめたる当歳の子よ

時彦 蓼艸 明雅

日本語の通じぬ国は嫌ひなり  
炬燵の中で直す時差ボケ  
深雪晴れ槍投げの槍突きささる  
若き男の背筋まっすぐ  
尼となり果てても甘き恋の味

時彦 蓼艸 明雅

鍵穴にただ蛇の衣ゆれ

植木屋の日当騰るばかりにて  
赤提灯の夜々のチューハイ  
彼岸花咲き躁病の文が来る  
せつせつと吹く秋風の中  
月登る単身赴任の我と猫  
ゆらりと胸の深海魚ゆれ

時彦 蓼艸 明雅

擁かむとベットカバーをはぎ取りて  
玻璃戸のあなた皆菜種梅雨  
きしみ行く柩車に花の散りかかり  
老人一人田の畦を塗る

時彦 蓼艸 明雅

昭和六十年四月二十八日首尾  
於 俳句文学館  
連衆 川野蓼艸  
草間時彦  
東 明雅

表(四句)

時彦 発句をひとつお客様から頂きました。  
蓼艸 本日は、どうも三役の揃い踏みに序二段が混った  
ように恐縮でございます。では……  
菜の花に銀鳳の雨加賀泊り  
しづき立て加賀友禅の雪解川  
蹄鉄の音の近づく夕桜  
春 月や木の間は余呉の水明り  
時彦 亭主が選んではなんですが、月が発句に出るとか  
えって面白いのでこれをいただきます。

春 月や木の間は余呉の水明り

蓼艸

時彦 脇は亭主です。季を決めましょう。仲春で。

帰りし鴨に睡るにおどり

時彦

時彦 「四方より花吹き入れてにおの波」を踏まえまし  
た。芭蕉の句は膳所での作。余呉も琵琶湖の一部です  
から、この脇は花を隠し味にしています。

明雅 結構ですが困りました。これはいかがでしょ  
う。

蒸饅まづ落付きの茶を飲みて

時彦 余呉から若狭へ出たわけですね。

明雅 余呉から若狭でけ句が続きますね。蕨餅にし  
ま

す。

蕨餅まづ落付きの茶を飲みて

明雅

明雅 これで落付きました。(笑)

蓼艸 四句目を軽く付けようと思いと難かしいですね。

歩みそめたる当歳の子よ

蓼艸

明雅 歩むと帰るは歩行体かな。

蓼艸 打越しは鴨ですから……。

時彦 いや、いいじゃないですか。決まりました。

裏(六句)

蓼艸 裏に入りました、折立は秋ですか？

明雅 いいえ秋は出せません。秋ですと月を出さない  
と素秋になります。月は発句にありますから。

蓼艸 それは申訳ないことをいたしました。

明雅 いえいえ。発句に月というのがこの頃ありません  
ので、かえって面白いのです。

時彦 秋はあとで出せますよ。それではもう一句雑でよ  
ろしいですね。少し離れ過ぎるかなあ。

日本語の通じぬ国は嫌ひなり

時彦



明雅 ああ、面白いじゃありませんか。

時彦 「国」の方がいいかなあ、「国」より「旅」の方がいいかなあ、いづれにしても「旅体」の句です。

明雅 清酒一合それが生甲斐

時彦 一合で足りるんですかネ。(笑)

明雅 一合というところがいいところで、一升では……いけません。ちょっと待って下さい。作り直します。

時彦 お茶と酒が同じ作者だからなあ。この辺で夏か冬を出しておかないと、あとで忙しくなっちゃって。

明雅 そうですね。二十韻でうっかりしてますと、あれも出てない、これも出てないなんて事になりがちですね。挙句で慌てて釈教を出した事もあります。

時彦 私は二十韻の場合、神祇と釈教はどちらかひとつでいい事になっています。キリスト教でも、アラアの神でも。

明雅 冬を出しました。

炬燵の中で直す時差ボケ  
恋は忘れず頭ボケても

明雅 先の方をいただきます。

炬燵の中で直す時差ボケ

明雅 では一応。

深雪晴れ槍投げの槍突きささる

明雅 大きく転じましたね。ここいらで恋を誘いましょうか。

若き男の背筋まっすぐ

明雅 若き男の背筋まっすぐか……

なるようになれと唇つけ眼をつぶり  
尼となり果てても恋の火は消えず

どちらがいいでしょう。難かしいですね。ちょっとお菓子頂きます。おや、これは何とも奇妙な味がしますね。(伊那の「白梅」あんの中に甘い梅が種子ごと入っている) 甘いような酸っぱいような。よし。こうしよう。

尼となり果てても甘き恋の味(笑)  
尼―甘―が続くかな。

髪を剃り果てても甘き恋の味、としまししょうか。

明雅 先生。髪を剃るで分るんですが、この句は尼で生きたと思えますから、尼の方でいただきます。

尼となり果てても甘き恋の味

明雅 この尼は実は蛇身だったんです。

鍵穴にただ蛇の衣ゆれ

ついでにもう二句

腹いせに猫蹴る片思ひ

沼の真闇にネックレス投げ

時彦 沼の真闇は余呉の海があるから、鍵穴をいただきます。蛇の衣で夏になりますね。

鍵穴にただ蛇の衣ゆれ

明雅 蛇淫ですね。恋は離れて、名残りの表に入ります。

名残りの表(六句)

時彦 尼で釈教が出ました。夏は一句で捨てますか。

明雅 捨ててもいいですね。あ、出ましたネ。

時彦 植木屋の日当一万五千円。

数字はいいかな。酒一合はやめたのでしたね。じゃあいか。しかし、少しばかり、詩が乏しいですね。蛇の衣で植木屋を出したのですが……。

植木屋の日当騰るばかりにて

時彦 こんなところでお宥し下さい。明雅先生、つけ難いでしょう。申訳ありません。

明雅 いえいえ大丈夫、ちょっと近いかな。

赤提灯で夜々のチューハイ

明雅

明雅

時彦

明雅 出てますよ、炬燵が…。(笑)

蓼艸 なるほど、四ツ足だ。

明雅 この句は恋の呼び出しですか？

蓼艸 いえいえ、これはただの躁病の手紙です。私の友人で便箋に三十枚もびっしり書いて来るのがいましてね。こいつはおかしいなあと思っていましたら、やっぱり躁病でした。

明雅 三句去っていますから、次はまた恋にしてもいいですね。恋の月でもかまいません。

時彦 さあ難かしくなってきました。これはどうでしょう。はつきりした恋じゃありませんが恋っぽいと云うところ

で。  
せつせつと吹く秋風の中  
明雅 いただきます。じゃ、月はこれでどうでしょうね。

月登る单身赴任の我と猫

明雅

蓼艸 今度はほんとの四ツ足だ。(笑)

時彦 猫飼っていらっしやるんですか。そういえば昨日は句会で猫の句をお出しでしたね。あれは面白かった。

孫の抱き心地仔猫の抱き心地

明雅 猫は飼っていませんが、孫の顔が猫に似ているんで、ニャンコとっているんですよ。(笑)

蓼艸 さて、

玻璃戸のあなた皆菜種梅雨

陽災抜けて甲冑の父

明雅 みんな面白いなあ。

時彦 菜種は花ですがついてもいいわけですね。

明雅 すりつけですからかまいません。

時彦 では、この句をいただきます。

玻璃戸のあなた皆菜種梅雨

蓼艸

時彦 無常を花の句で出してはいけませんか？

明雅 いえ、そんなことはありません。どうぞ。

時彦 では。

きしみ行く柩車に花の散りかかり

時彦

明雅 あ、これは珍しい花が出ました。面白い。散りかかるか…。何をつけるかな。人情の句にしないといいけない訳ですね。

額の上にまどふ春の蚊

お玉杓子を取って遊ぶ子

老人一人田の畦を塗る

復活祭の鐘の音を聞く

時彦 みんなうまいですね。ではこれを。

老人一人田の畦を塗る

明雅

角巻の行くさいはての町

ゆらりと胸の深海魚ゆれ

笛や太鼓の町抜けて行く

時彦 角巻は冬なので、これは季移りになりますね。二番目のほうまいなア。ゆらりをいただきます。

ゆらりと胸の深海魚ゆれ

蓼艸

名残の裏 (四句)

明雅 これで魚も出ました。地名は出てますか。ああ、発句に余呉がありますね。では花の句は時彦先生がつけて下さい。蓼艸さんはもう一度時彦先生のあとをつけて、僕が挙句をつけます。

時彦 私が花の句とは光栄です。その前にこれを。

擁かむとベットカバーをはぎ取りて

時彦

時彦 初めは「はぎ取りてベットカバーをまるめたる」だったので、弱いのと、用言過多なので、直させて貰いました。これで、深海魚も恋になりました。

明雅 ウーン。なるほど。

蓼艸 花前で恋句のあとというのは難かしいですね。こんな所で如何でしょうか。

バックミラーに背信の顔

サイドミラーに背信の虹

時彦 老が出ていませんでしたし、数字も出て丁度よかったです。これで満尾しました。一時から始めて、二度二時間半でした。早かったですね。ありがとうございます。

明雅 ありがとうございます。どうでしょうこの巻は時彦 少し山がずれたかな。でも、けっこう追込みはきいたんじゃないでしょうか。

ゆらりと胸の深海魚ゆれ。これがいい、これが効いています。これで立直りました。

蓼艸 二十韻と言うのは何でも早目、早目に出していかないといけませんね。歌仙のそのうちに出せばいいやという癖があります。ついでと忙がしくなります。

明雅 二十韻はまだ半年の歴史しかないんですから、場数を重ねて早く馴れるといいということでしょうね。

時彦 二十韻ですと、巻き上がったとき、まだ体力が残っていますよ、巻いたあと、余力が残っていて、あとのおしやべりができていい、という人が多いです。歌仙は四時間はかかりますものネ。ぐったりしてしまいます。(笑)

明雅 しかし、かくし味や箸休めができないという嫌いはありますね。今日は発句に春と月が出て、雪も出て、雪月花になりました。

蓼艸 あとは二十韻にいい名前がつくとよろしいですね。今日はこんな晴の席にお招きいただきましてありがとうございます。(文責 式田和子)

絶頂の城

付勝練習歌仙

東 明 雅

投句締切 7月20日

絶頂の城たのもしき若葉かな

夏鷺のこだまする溪

枕蚊帳熟睡の夢の安からん

曝る番茶に茶柱の立つ

抄らぬ稿にしらじら月さして

新聞少年やや寒の道

通草の実供へてありぬ岐神

嘘のキッスが本物となり

九句目

治定 親が居て子が居て電話ままならず

1 湯上りの薄化粧する楽屋裏

2 構曳は不動産屋の店の隅

3 待ち伏せるレポーター撒く洋かつら

4 ブロンドの焰とゆらぎジャズダンス

5 いそいそとかよひ女房きめこみて

6 ひたむきな演技の彼に身もしびれ

7 朝飯を作ってくれにほだされて

8 二年生三年生に誘はれて

9 どうしたらいいの未婚の母はいや

10 切り出せし婚前旅行地中海

蕪村

正江

櫻晴

東夷

隆秀

たかし

貞子

昌子

妙子

杉亭

和子

櫻晴

美保

隆秀

淳子

みづゑ

哲

あかり

11 長枕ベント買ってと声甘く

12 この中を見せてと胸を引撮かれ

13 抱き寄す妻は昼間は上役で

14 長屋から億ションに住む罍ひ者

15 胸さはぐ電話のベルの鳴る度に

16 火の国の肥後のモッコス一目惚れ

17 世帯持ち料理当番隔日に

18 奥様に悪いと言って泣くばかり

19 ままごとの部屋でアイロン卵焼き

20 卒論の清書いそそ書く彼女

21 言ひ訳の種の尽きたる午前様

22 艶聞にただ婉然と笑みの眉

23 湖の精マイヨールの女息をため

24 指先に思ひの丈を夜の闇

25 二枚目の科白は昨夜をそのままに

26 何事も財産次第と割り切って

27 抱かれるてうしろめたさのつき纏ひ

打越が人情なし、前句は自あるいは自他半であるから、

今度の付句は人情の句なら何でもよかった。前句が恋句で

あるから、付句も恋句であるべきことは当然である。

普段の俳諧の席でも恋句となると、急に一座が色めき立

って活気づくのであるが、このことは付勝歌仙でも同じ

で、いろいろおもしろい恋句が出て、撰者は取捨に迷った

が、結局、治定するのは一句しか取れない。これが辛いところである。

由美子

遊

正雄

一青子

麻子

昌子

啓世

東夷

蓼艸

黄夜

智子

千町

正江

貞子

孝子

幸子

奈美子

1は役者の演戯のキッスが本物の恋になってしまったというありがちなことであるが、それだけにいささか根があるとも言えよう。楽屋裏だけでそれを匂わせた表現は老巧である。2は構曳の場所がおもしろい。3はジュリーに呼び出された田中裕子の面影付けでもあろうか。4は付心やや平凡、表現もややオーバー気味。5は女心の真実であろうが、ややおとなしいのと、留めがて留めになって、三句前の「月さして」に近いのが難である。6も付心、表現ともにもとすぎず。意外性が乏しい。7の「朝飯作ってくれ」は軽みもありおもしろいが、これも「て留め」である。8も「て留め」、しかし内容・表現ともに意外性もある。9は傑作である。内容もおもしろいし、表現が一風変わって直接的に自分の気持を訴えているところに緊迫感もある。最初はこの句を治定しようかとも思ったが、裏の恋としてはすこしおもしろ過ぎるのではないかという反省から断念したが残念であった。10はハイカラな現代風俗で打越からの転じが十分であった。11も長枕とかベントとか現代風俗でよいのだが前句に対する付味が今一步である。12はその点前句に対する付心をはっきりし過ぎる位である。13はまたおもしろい情景を設定したものだ。このようなものも近頃の風俗で目新しさがよい。14はすこし「根がある」。嘘のキッスが本物となったので、今までの長屋から女性が億ションに住むようになったというのではありきたりでおもしろみが足りない。15は付心・転じともにくぐれている。しかし、表現があまり素直なために曲がない。

16 肥後のモッコスとは頑固者とか一徹者とか言う意味である。一目惚れした肥後のモッコスがだまされて燃え上がった姿と見ればあわれが深い。17 ひよんな事から世帯をもった二人が隔日に料理を作るといふ円満な家庭となった。おめでたい話であり、ユーモアもあっておもしろいが、それだけに恋句としてのパンチにはいささか欠けるところがあろう。18 はいささか明治調ではなからうか。19 は現代っ子、それも女子大生の下宿めいた感じがする。ともに悪くはないが、付心に今一步の工夫が欲しかった。20 も学生同士の火遊びか。この句には「頭上らぬはじめなりけり」とこの次の付句もついていたのには恐れ入りました。21 もよく世間にあることだが、言い訳の種が尽きてはさぞ午前様もお困りであろうと同情するだけである。22 は大女優たとはは噂に上った山本陽子などの面影であろうか。艶聞・婉然・笑みと、ちゃんと頭韻をふんで作られているところが憎い。23 これはまた素晴しくモダンな句で、付味・転じともに十分である。その点、次の24 はやや昔風というか、貫一・お宮の時代の恋であらう。打越がやや古いので、この付句はもすこし現代的の方がよいのではなからうか。25 の二枚目は役者役柄としての二枚目の意味でなく、色男の意味の二枚目の意であらう。そのように解する方がよい。26 は恋の意薄く、27 は平凡。さて、治定の句、穏かな句ぶりであるが、その中に複雑な状態・心理を描き尽している、裏の恋句としてはこの程度がよいと思うので、敢て治定した。

芦丈先生墓参行

福井隆秀

四月二十二日、午前八時半、われわれ連衆十五人を乗せたバスは新宿を出発、一路伊那市へ向けて中央高速をひた走る。ことしの春先の天候は不順で、東京の花見は散々だったから、なにより天候が危ぶまれる。先生も同じお気持と見え、「高遠の桜氣遣ふ日和かな」を発句に、早速車中で隣送りの歌仙が始まる。相模湖を過ぎ、やがて甲斐駒や八ヶ岳連峯が現われる。正午、伊那市に到着。直ちに宿舎に入つて荷物を預け、割烹海老屋で蒲焼に舌鼓をうつ。三台の車に分乗して、高遠城址公園へ向う。

川あり、湖あり、深い谷間や橋ありの大段丘をなしているこの城址には、明治八年頃から植えられた一三〇〇本余のコヒガンザクラが、ところ狭しと咲き匂う。ときじくの風にひんぷんと花が舞っている。悲恋の大奥上臈、絵島の囚われの屋敷や郷土館を見学してのち、午後七時よりホテルで付勝二十韻興行。

何はともあれ煙草一服  
読み難き古文書迎る月の卓  
鈴虫育てて吾子はしやぎをり  
道の辺にうすむらさきの野菊咲く

しげと  
隆秀

夜陰激しき雨に明日の芦丈先生墓参を案じたが、早晩に至つて晴れ渡り、長桂寺の住職の読経で一同謹んで墓前に額ついた。続いて、芦丈先生のお宅である芋庵で、三組に分かれて、芦丈先生の「雲よ霞と六十余年の花乞食」を立句に、協起り付勝二十韻を巻く。

一青子  
杉亭  
淳子  
和子  
正江  
孝子  
千町  
啓世

先生御次男忠二氏の未亡人、お孫さんの美紗さんよりたらの芽の天ぶら、筍の胡桃和えなど都会では味わえぬおもてなしを受け、殊に庵より真正面に聳え立つ残雪きらめく南アルプス仙丈岳の雄姿を目のあたりにして、至福の刻を過ぎさせていただいた。

とまれ、芦丈先生の遺徳を偲ぶさざやかな今回の興行が天候に恵まれ、無事済んだことを感謝するものであります。

高遠の桜 膝送り

高遠の桜氣遣ふ日和かな  
ハイウェイ急ぐ軟東風のバス  
鳥交る峠の茶屋のしづかにて

明雅  
徒司  
彬風

山椒たつぷり伊那の鰻に  
ゆつくりとマニキュア塗つて御出勤  
ペーズリ模様のストッキングはき  
優しくて無口な彼はしつこく  
怨霊となり出たき角栄  
サラ金がひつかけられし五億円

青風  
と司  
雅世  
千町  
孝子  
正江  
和子  
啓世

かんかんかんと踏切の鐘

澄む月に雑木林のしづもりて

胸吹きよぎる色もなき風

秋遍路いたはりあひて老ふたり

「砂の器」は清張の作

野良のトラ窓を覗きてくさめする

少し寄り目のビスコ人形

花散りぬ太鼓櫓の天下人

墨田の岸にレガッタのわれ

三峯川に花ふりかかる夢のごと

乱れて舞へる蝶は幻

ふらここの高き低きに孫の居て

百円珈琲なれしこのごろ

鍵穴を探すマンション月明り

残る螢を手移しにする

恋捨てし遠流女人にちちろ鳴く

これれまたよし地酒大國

宵宮の半纏匂ふ青簾

杉苔茂り白き飛び石

叱られておつかひに行く姉弟

ジャンコクトオの映画なつかし

香焼いて悪魔迎へる羽根枕

唯言ひなりに開く札入れ

隊商の着きし敦煌霜の月

駱駝の背に運ぶ経巻

雀らの何を好んで藪知らず

えたいの知れぬ佃煮も食ひ

咲き盛る桜の下の一会なり

芋庵の軒に糸遊

雲よ霞と六十年の花乞食

旅笠の人慕ふ燕

春炬燵閉されてをり箒の間に

無雑作に割る饅頭の餡

里ことばなつかしく聞き月円か

詩心わくそこはかとなく

紅椿千顆万顆の色みちて

いとうららかに老の入舞

雲よ霞と六十年の花乞食

風光るこの一筋の路

初蝶の宿場の町を往き来して

読めぬ古文字貼り交せてあり

琴袋脇に曇みて月を待つ

通草みつつけし御下げ髪の娘

後れ蚊をびしつと叩き損ねたる

釣り落としたる魚の大きき

ハンカチを雑巾にして仏となり

硝煙絶えず臭ふ地の果

納得のうちに志願のじゃばゆきさん

二分の一の恋はやされて

望まれて伯爵夫人玉の輿

テニスをやめてお茶に専念

あかぎれを厨に嘆く寒の月

猫の囁につられ囁めす

境内の縄張り貫い賭け将棋

石上神宮杉なりの樽

曇りても句碑に散り交う山桜

連れ立ちゆけば百千鳥鳴く

花乞食 杉内徒司

花乞食 東明雅

花乞食 東明雅

花乞食 東明雅

花乞食 東明雅

花乞食 東明雅

花乞食 東明雅

花乞食 東明雅

花乞食 東明雅

花乞食 東明雅

花乞食 東明雅

